

KATE Newsletter

関東甲信越英語教育学会 編集委員会

No.118 July 10, 2023



CONTENTS

巻頭言「After コロナ時代の英語教育」(西垣知佳子)	2
〔特集：関東甲信越英語教育学会 2022 年度春季研修会〕	3
1. 授業実践報告(小学校)	
「理解したもの、できたもの」が使えるようになる喜びを味わわせる指導と評価の工夫 —市内全校が取り組む指導ハンドブックの実践から— (発表・報告者：加瀬政美先生)	3
2. 授業実践報告(中学校)	
中学校英語授業における「指導と評価の一体化」を目指した事例報告 (発表・報告者：田村岳充先生)	4
3. 授業実践報告(高等学校)	
＜高等学校＞新学習指導要領に基づいた3つの指導実践例 (発表・報告者：土屋進一先生)	5
4. 講演	
新学習指導要領の指導と評価における現状と課題、次のステップ —学年ごとの目標、三観点、言語活動に焦点を当てて— (発表・報告者：酒井英樹先生)	6
5. 春季研修会を視聴して(報告者：伊東 賢)	8
〔研究推進委員会報告〕	
第22回 英語教育「なんでだろう？」座談会： 3年間で英語名詞句把握能力はどのように変化するのか—日本人高校生の場合— (講師：伊藤泰子・臼倉美里／報告者：冨水美佳)	9
〔研修企画委員会報告〕	
5月月例会：学級経営の中核をなす英語の授業 —生きた言葉でコミュニケーションできる生徒の育成を目指して— (発表・報告者：尼寺圭悟先生)	9
関東甲信越英語教育学会日誌	11
編集後記	12

巻頭言

「After コロナ時代の英語教育」

関東甲信越英語教育学会会長 西垣知佳子（千葉大学）

日頃より、関東甲信越英語教育学会（KATE）の活動にご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございます。

社会の変化が激しい昨今、教育界の変化も激しくなっています。2021 年発行の KATE Newsletter No. 114 で斉田前会長は「With コロナ時代の英語教育」というタイトルで巻頭言を書かれています。それから 2 年。コロナ禍を経験し、After コロナ時代を迎えた教育界においては、この 2 年の間に多様な変化がありました。まず、GIGA スクール構想のもと、新型コロナウイルス感染症の拡大が契機となって、「1 人 1 台端末」が急速に進展し、児童・生徒は端末機器をまるで文房具のように使いこなすようになっています。また、オンラインを使った授業形態も定着し、例えば、都立高校・中等教育学校等では、全ての授業をオンライン形式で実施し、生徒が原則自宅から授業に参加する「オンライン学習デー」が今年度からスタートしています。

さらに、学校教育における AI の影響も少なくありません。特に、2022 年 11 月に公開された対話型の生成 AI の ChatGPT は、幅広いトピックについての質問に高い精度で迅速に回答し、多言語に対応しているため様々な言語の翻訳ツールとして利用でき、詞やストーリーを生成したり新しいアイデアを提案したりする等、そのインパクトは極めて大きいものとなっています。AI が学校に導入されれば、教育はカスタマイズされ、児童・生徒の資質・能力や興味に合わせた個別指導を実現することも可能でしょう。また、AI が自動的にテストや課題を生成し採点を行えば、教員の負担は軽減され、教員はより多くの時間を児童・生徒との関わりや授業改善に費やすことができるでしょう。

しかしその一方で、AI 技術の進化自体は、児童・生徒の学力や英語力の向上を保証するものではありません。AI は教師や児童・生徒の思考やスキルを支援・補完するために使用されるべきもので、それに頼りすぎると、負の影響をもたらす可能性があることにも目を向ける必要があります。英語教育における AI の活用、AI との共存は、大きなテーマとなっています。

こうした変化の目まぐるしい状況にある中、KATE は教育現場と研究を結び、英語教育の発展に貢献できるよう努力し、まい進してまいります。そのために KATE では、今年度も各委員会主導のもと、活発に学会活動を行ってまいります。以下にその一部をご紹介します。

- ・ 5 月 13 日（土）の月例会をスタートに、座談会、読書会を開催します。また、年度末 3 月開催の春季研修会（オンライン）では、基調講演に関西学院大学の泉恵美子先生を講師にお迎えする予定です。
- ・ 8 月 26 日（土）、27 日（日）には第 47 回埼玉研究大会（オンライン）を開催します。今大会の大会実行委員長は阿野幸一先生（文教大学）、大会実行副委員長は桐井誠先生（文教大学）です。
- ・ 12 月 9 日（土）に、特別講演会（全国英語教育学会と言語系学会連合との共催）を開催します。講師は内田諭先生（九州大学言語文化研究院准教授）を予定しています。
- ・ 学会誌『KATE Journal』、そして『KATE Newsletter』、『What's New』を発行します。

私どもは、会員の皆さまが KATE を身近な存在に感じ、自由に活発に活動に参加していただけるよう今年度も努力してまいります。

特集：関東甲信越英語教育学会

2022 年度春季研修会

◇授業実践・研究報告を行って◇

1. 授業実践報告（小学校）

題目『「理解したもの、できたもの」が使えるようになる喜びを味わわせる指導と評価の工夫—市内全校が取り組む指導ハンドブックの実践から—』

発表・報告者：加瀬政美

（千葉県旭市教育委員会）

小学校 5・6 年生で教科として外国語を学び、小学校 3・4 年生で外国語活動が進められ 3 年が経とうとしています。外国語の授業で何をどのように教えていこうか 1 人で悩んでいる先生は少なくありません。「使える！できた！」と達成感を味わわせる Small Talk の一工夫を紹介します。

本研修では、市内全校が組織で取り組む「つながり」をキーワードにした実践における「メモの工夫」と「フィードバックタイム」に焦点化した授業実践を紹介します。

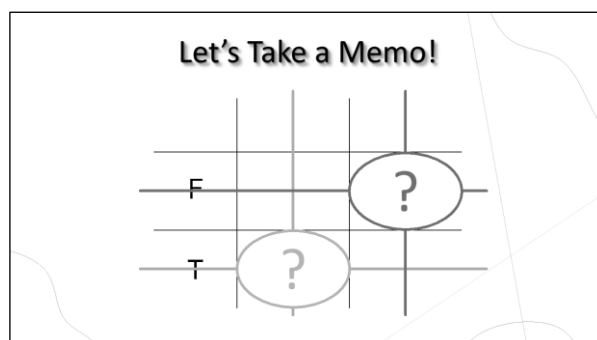
○「使える！できた！」と達成感を味わわせる Small Talk の一工夫

本提案は、旭市外国語教育プロジェクトチーム作成の指導ハンドブック（旭市教育委員会、2022）をベースに、市内全校の外国語に携わる指導者が共通理解・共通実践のもと、Small Talk に一工夫をした実践報告です。「Small Talk + Action!」として、教室内での教師の些細な Small Talk から発展させ、第二言語習得を指導する教室内の様々な場面と状況から有効なストラテジーとアプローチに重きを置けば、学習者のエンゲージメントをさらに高めるのではないかとこの視点で取り組んでいます。

工夫① メモの工夫

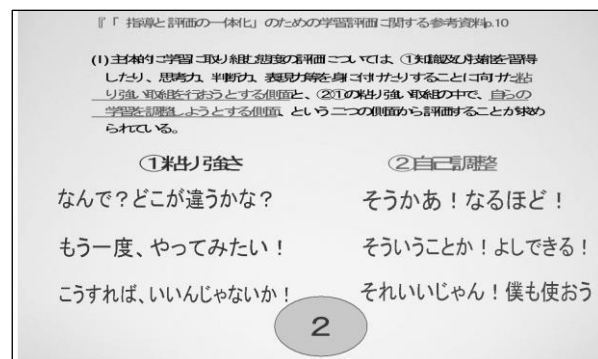
アクティビティの後、代表 2 人が仲間の前でプレゼンテーションをします。この 2 人以外は全員リスナーです。代表以外の聞き手はリスニングにフォーカスさせることが大事であり、2 人のやり

とりの概要を聞き取ることでリスニング力が磨かれる機会としたいと考えました。その scaffolding（足場かけ）としてメモがあります。そのメモの取り方を工夫しました。（1 つ目の図）



工夫② 「フィードバックタイム」で児童の学習エンゲージメントの高揚

仲間のプレゼンテーションの発話やモデルとなる発話と児童自らの発話を比べ、目標にどれだけ到達できたか、課題は何かという視点で振り返る時間を確保し、「フィードバックタイム」を設けます。そこに児童の「主体的に学習に取り組む態度」の 2 つの側面、「粘り強さ」と「自己調整」を意識させるように仕掛けます。2 つ目の図のような意識を児童に持たせ、Uptake & Forced Output（気付きに基づき習った表現等を意識的に使ってみる）の機会を設け、再度アクティビティを行い、「できた！」という充実感を味わわせる瞬間を大切に授業を行った結果、「もっと英語をやりたい」という児童と、「次はここで英語を使わせたいためこう工夫する」という指導者が増えました。



引用文献

旭市教育委員会（2022）.『小学校外国語活動・外国語指導ハンドブック 2022<第5版>』旭市：旭市外国語教育プロジェクトチーム。

国立教育政策研究所教育課程研究センター
(2020).『「指導と評価の一体化」のための学
習評価に関する参考資料 小学校 外国語・
外国語活動』東洋館出版社.

2. 授業実践報告 (中学校)

題目『中学校英語授業における「指導と評価の
一体化」を目指した事例報告』

発表・報告者：田村岳充 (宇都宮大学)

1. 評価についての認識

現職英語教員のみならず、学部学生の認識にお
ける評価のイメージは、記録に残す評価 (総括的
な評価) に偏ったものであることが多い。生徒の
学習過程をつぶさに見取り、評価 (形成的な評価)
すること、見取ったことをもとに必要かつ適切な
支援・指導の手立てを講ずること、評価したこと
をもとに次の授業を作っていくことの大切さを
再確認したい。

2. 指導と評価の一体化を目指す前に考えたいこ と (育てたい生徒の姿)

行われている指導が一体何に向かってのもの
で、適切かどうかを判断するためには、目指すべ
きゴールが適切である必要がある。そこで、自校
の CAN-DO リストを改めて見返し、リストに記
された学習到達目標が適切かを吟味したい。育て
たい生徒の姿は中学校だけでイメージすべきも
のではなく、小学校の学びとのつながりの中で検
討すべきである。その1つの方法として、小中の
共通 CAN-DO を作成することを提案したい。

3. 小中の共通 CAN-DO リスト作成事例 (山口県 山口市立大内中学校区の事例)

(※紙幅の関係で、事例を1つに絞って紹介)

出典：「山口市立大内中学校区小中共通 CAN-DO
リスト」 入手先 <https://www.yamaguchi-ygc.ed.jp/ouchi-j/pdf/r4/R4cando.pdf>

学習到達目標のみを記載するのではなく、達成
状況の評価する場面・方法を予め決め、リスト
に記載していることで実効性を高める工夫がな
されている。

4. 指導と評価の一体化の事例

次に、発表・報告者が研修講師として関わった
ものの中から、指導と評価の一体化を目指した取
り組みを紹介する。

(1) 鳥取県スーパーバイザーによる学校支援事業 (鳥取市立湖東中学校での英語授業改善の事例)

これまでに過ごしてきた中で最高の夏休みに
ついて伝え合う単元末の言語活動を2時間かけて
行い、タブレットで撮影した自分の発表を何度も
見直し、生徒が自分で納得のいく発表ができるま
で何度も Trial and Error できるようにした。机
間指導、タブレットの映像の確認等を丁寧に行い、
よさをクラス内で共有したり、具体的なフィード
バックを返したりする等、指導と評価の一体化を
行った。それまでと比べ、生徒の発話の自由度が
高まり、エラーはあるものの、伸びやかに発表す
る姿が見られるようになった。

(2) 栃木県英語教育連携プログラム開発研修 (同 地区内の小中高5名の教員がチームを組んで授業 作りを行う取組事例)

令和4年度の共通テーマは、話すことの力を育
む指導であった。チーム内で話し合い、小中高で

共通して実践すること（例：Small Talk）を決め、実践し、その成果と課題を省察した。

足利市立第二中学校の実践では、話すこと〔やり取り〕、〔発表〕ともに、評価のためのルーブリックを事前に生徒に提示し、共有した上で学習を進めた。授業の終末の振り返りを丁寧に行い、生徒は事前共有されたルーブリックと、本時の自分のパフォーマンスとを照らし合わせながら自己評価を継続的に行った。また、教師も授業での見取りをもとに個々の生徒にフィードバックコメントを返すようにした。

5. 終わりに

生徒を励まし、育てることにつながる指導と評価ができるだけ多くの教室で実現されるよう、今後も現場に足を運び、先生方と協働していきたい。特に、ローカルな関わりを大切に、単発の研修で終わることなく、継続的な関わりができたかと考えている。成果を焦って先生方を追い立てることのないよう、時間をかけ、先生方自身が生徒のために変容していけるような支援を続けていこうと考えている。

3. 授業実践報告（高等学校）

題目「＜高等学校＞新学習指導要領に基づいた3つの指導実践例」

発表・報告者：土屋進一

（西武学園文理高等学校）

はじめに

今回の研修会では、新学習指導要領に基づく3つの指導実践例（1. パフォーマンス評価、2. 教科横断的な視点に立った指導、3. 授業におけるICT活用）を報告しました。本稿では、上記1～3の概略について振り返りたいと思います。

1. パフォーマンス評価

新学習指導要領では、「話すこと」が発表とやり取りに細分化され、指導する技能が4技能5領域へと拡大されました。また、「読むこと」「聞くこと」から「話すこと」「書くこと」への技能統合も授業では求められています。こうした技能統合の

事例として「読むこと」「聞くこと」から「話すこと」「発表」を報告させていただきました。具体的な発表の内容と実施の手順を説明し、評価基準（ルーブリック）も交え、実際の生徒の発表動画を参加者の先生方に視聴してもらいました。ルーブリックの一部には、「教科横断的な視点」も入れたことで、新学習指導要領に基づく一例をご紹介できたと思います。

Presentation in English 【Rubric】			
Class () No. () Name ()			
Criteria	Points	Criteria for Evaluation	
1 内容・論理性	5	意見や主張のほかに、課題の解決策などを提示して、それらについて適切な理由や根拠とともに詳しく述べている。	
	3	意見や主張とそれについての理由や根拠を述べている。	
	1	意見や主張とそれについての理由や根拠に矛盾があるか明確に述べていない。	
2 発表・姿勢	5	視線を前に向け、堂々と発表している。	
	3	ときどき視線が下がり、発表している。	
	1	視線下を向きながら発表している。	
3 発表資料	5	伝えたい内容が整理され、要点や重点などが明確、かつ効果的である。	
	3	伝えたい内容が整理され、要点や重点などが明確である。	
	1	伝えたい内容が整理されておらず、要点や重点などが明確でない。	
4 統合・活用	5	教科横断的な視点や英語ニュースで得た知識・情報を整理しながらそれを統合・活用している。	
	3	部分的に教科横断的な視点や英語ニュースで得た知識・情報を整理しながら統合・活用しようとしている。	
	1	教科書以外で得た知識・情報を整理しておらず、また統合・活用もしていない。	
Overall Evaluation		/20	

2. 教科横断的な視点に立った指導

新学習指導要領が掲げている「教科等横断的な視点」をどのように実際の授業の中で行うかについて、古文と英語による教科横断型授業のダイジェスト動画を参加者の先生方に視聴してもらいました。『源氏物語「桐壺」』の原文と複数の英訳を比較することで、言語間の比較や文化を踏まえた翻訳とはどのようなものかを生徒に考えさせ、最後にオリジナルの英訳を作成させる授業でした。



出典（左）：土屋進一（2022）．「他教科の学習内容を英語で学ぶ授業で、生徒の思考を深め、複眼的な視野を養う」『VIEW next 高校版 2022年度4月号』（40頁）ベネッセコーポレーション．入手先 <https://view->

next.benesse.jp/view/bkn-hs/article01470/

出典(右): 上記授業のダイジェスト動画. 入手先

<https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article05116/>

3. 授業における ICT 活用

新学習指導要領では、ICT の活用がどの教科・科目でも求められています。しかし、1人1台の端末をどのように教室で活用するかについて多くの先生が悩まれているのではないのでしょうか。一番大切なことは、「ICT＝ツール」であり、授業をより効率よく学習効果を上げるためのものであるということです。そこで、誰でも簡単にできる Google Workspace の3つの機能を使った指導実践例をご紹介します。

- (1) Google Jamboard による思考の整理と Speaking の準備
- (2) Google Spreadsheet による一斉英作文
- (3) Google Document の音声入力による発音チェック



おわりに

今回の実践報告では、新学習指導要領に基づいた3つの実践事例を報告させていただきました。今回の事例は、試行錯誤をしながら辿り着いた指導の一例であり、まだまだ改善の余地はあると考えています。しかしながら、本事例を契機とし、参加された先生方によってさらなる良い指導法が誕生し、日本の英語教育の発展に貢献できたとしたら、私にとってこの上ない幸せです。

謝辞

今回、このような機会を与えてくださった KATE 研修企画委員長 物井真一先生には事前の打ち合わせから研修会当日のサポートに至るまで多大なるご協力をいただきました。ここに感謝の意を申し上げます。

4. 講演

題目「新学習指導要領の指導と評価における現状と課題、次のステップ—学年ごとの目標、三観点、言語活動に焦点を当てて—」

発表・報告者：酒井英樹（信州大学）

本講演では、学習指導要領の改訂を受けた現状と課題を整理した上で、今後どのようなことを意識して指導と評価を実践・研究していくべきかについて話させていただきました。

1. 育成すべき資質・能力と学年ごとの目標

学習指導要領において、各学校においては学年ごとの目標（CAN-DO）を適切に定めることとされています。中学校及び高等学校においては今までも「CAN-DO リスト形式の学習到達目標」を作成してきたところですが、新たな言語力観（「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」）の三つの柱から成る資質・能力）と領域別の目標が提示されましたので、学年ごとの目標（CAN-DO）も、三つの柱を意識して設定することが重要です。

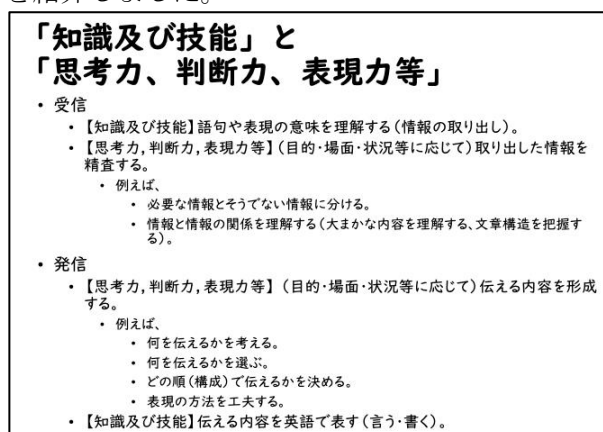
指導や評価において学年ごとの目標（CAN-DO）が十分に活用できてない課題があります。学年ごとの目標を作成・改善する際に検討すべき点として、(1) 単元の目標だけでなく、学年ごとの目標になっているか、(2) 領域別の目標と合致しているか、(3) 学年ごとに異なる文言となっているか、(4) 何を指導すべきかが明確か、(5) 評価が可能かを説明しました。

2. 三つの柱からなる資質・能力の捉えとその資質・能力を三観点で評価すること

学年ごとの目標に関して、「知識及び技能」と

「思考力、判断力、表現力等」の違いを理解した上で、それぞれの領域で指導すべき内容を決めておくことが重要です。

「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」の違いについてスライド1枚目に示すように整理しました。この整理に基づいて、話すこと[やり取り]、聞くこと、読むことに関して、学年ごとの目標の例、「思考力、判断力、表現力等」に関する指導内容の例、具体的な指導方法及び評価方法を紹介しました。



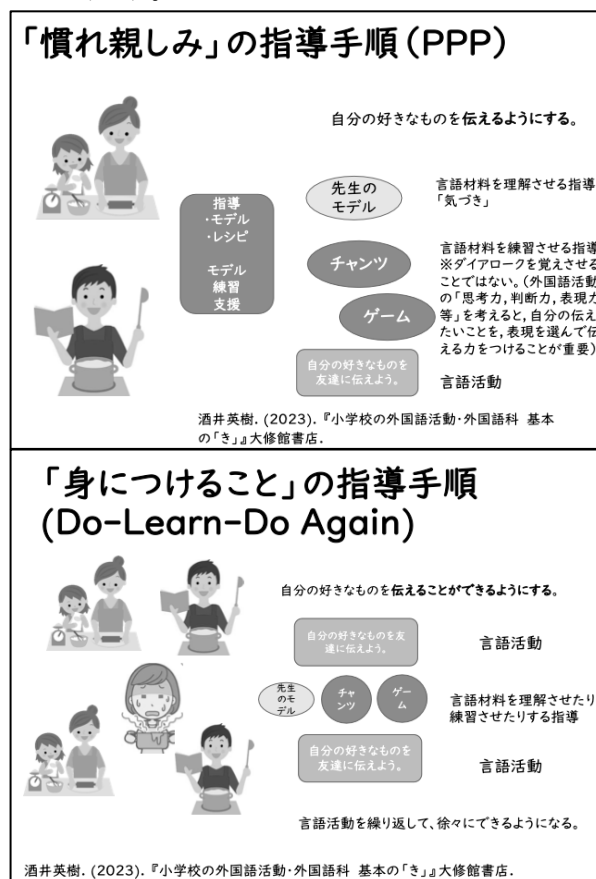
3. 言語活動と言語活動を通した指導

学習指導要領の改訂により、目標や内容だけでなく、学習過程まで明示されました。外国語教育においては、コミュニケーション能力の育成を、「言語活動を通して行うこと」としています。また、「言語材料について理解したり練習したりするための指導は必要に応じて行うこと」とされています。つまり、言語材料に関して適切なタイミングで指導する必要があります。

従来の外国語教授法やリーディング・リスニング・スピーキング・ライティング研究で提案されている方法や授業展開は、言語活動を中心としながら適切なタイミングで言語材料の指導を行うという学習過程との関連が明確ではありません。今後、理論的に検討していく必要があります。

本発表では「慣れ親しみ」と「(技能を)身に付けること」の違いに言及しながら、「慣れ親しみ」の指導手順と「身に付けること」の指導手順を提案しました。前者は簡単に言えば、Presentation-Practice-Production (PPP) の手順

(スライド2枚目参照)で、後者は Do-Learn-Do Again という手順です(スライド3枚目参照)。特に、小学校高学年以降の外国語教育においては、新出語句・表現・文法に関しては「慣れ親しみ」の指導手順を、既出の語句や表現・文法については「身に付けること」の指導手順を意識することが重要です。



今回、発表する機会を頂き、ありがとうございました。

◇春季研修会を視聴して◇

5. 春季研修会を視聴して

報告者：伊東 賢（茨城工業高等専門学校）

私はこのたび、2022年度春季研修会に参加させていただきました。都合により午前中のみ参加となったため、小学校と中学校の部を中心に発表内容と感想をまとめたいと思います。

小学校の部では、加瀬政美先生によるご発表を拝聴いたしました。千葉県旭市の小学校では、英語を担当する教員の全員が専科教員というわけではないため、児童の学びの公平性を保つために、教員の研修体制に力を入れているとのことでした。具体的には、市内の学校で共通して使用できるハンドブックを作成して、単元計画やタスクの進め方、評価方法を統一したり、指導の様子を動画にして指導手順を共有したりするといった取り組みが行われていました。またパフォーマンステストでは、目的・方法・言語使用・評価について詳細に基準がまとめられていました。これらは、現場の先生方の負担を軽減することにつながると同時に、どの先生から教わっても学びの公平性が保証されるという点で素晴らしい取り組みであると感じました。校種に関わらず、各学校の中においても、教員の指導経験や指導方法には違いがあることが多いと思います。教員間で情報を共有し、よりよい指導法を追求し、公平な学びを保証することの大切さを再認識いたしました。

次に印象に残ったことは、評価における「技能」と「思考・判断・表現」の観点の違いについて、具体例を添えてわかりやすくご説明いただいたことです。現在進行形を例にすると、「技能」とは、現在進行形を用いて聞いたり答えたり、日本語から英語にもできる段階であり、「思考・判断・表現」とは、特にコミュニケーションの実際の場面で状況に応じて活用できる段階に相当するとのことでした。実際にコミュニケーションで使えるかどうかという基準で考えると、確かに違いも明確になると感じました。また、言語活動に取り組ませる際に、改めて目的・場面・状況をしっかりと設定したうえで取り組ませる必要があると再認識

いたしました。

中学校の部では、田村岳充先生による「指導と評価」の一体化についての事例報告を拝聴いたしました。最初に、評価と聞くと、学期ごとに記録に残すための総括的な評価をイメージすることが多いが、日々の授業の中で学習者に与える「見取りの（形成的な）評価」も大切であるご説明いただきました。自分の授業を振り返ってみても、授業を行うことで精一杯で、一人ひとりの学習者に細やかにフィードバックを与えることができていなかったと感じます。記録に残す評価は「いつ、何で、どのように」という点をあらかじめ決めておくことで、それ以外の場面では指導と形成的な評価の一体化に注力できるというお話がありました。これからは、見取りの評価をできるだけ日々の授業に含めていけるよう、授業の進め方を見直していきたいと思います。

指導と評価の一体化のためには、指導の先にあるゴールが具体化されていることが重要で、育みたい生徒の姿（力）をイメージできていないと、ただ知識を伝えてそれを覚えさせることで終わってしまう危険性があるご説明いただきました。CAN-DO リストを再度見返して、教科内で共有して吟味することが大切であるというお話は、小学校の報告でも述べられた、学習者の学びの公平性の保証にもつながる点だと感じました。また、育てたい生徒の姿（力）が定まって初めて、それを達成するための指導を構想し、実践し、評価することができるというお話は、第46回栃木研究大会ワークショップ2でも強調されていた「バックワード」の単元構想にもつながると思いました。

私は現在高専に勤務しておりますが、日ごろ意識していなかったことに気づかされたり、今後の指導改善につながるような様々な情報に触れることができたりと、大変有意義な研修会だったと感じます。ご発表いただいた先生方、ありがとうございました。

◇研究推進委員会報告◇

第22回 英語教育「なんでだろう？」座談会

日時：2023年3月11日（土）14:00～16:00

場所：オンライン（Zoom）開催

テーマ「3年間で英語名詞句把握能力はどのように変化するのか—日本人高校生の場合—」

講師：KATE 研究推進委員会

伊藤泰子（神田外語大学）

臼倉美里（東京学芸大学）

報告者：冨水美佳（昭和女子大学附属昭和中学校・高等学校）

第22回座談会には、大学院生、小中高の先生方、大学の先生方など、計15名の、テーマに深く興味・関心を持っていただいている方々にご参加いただいた。

まず、伊藤先生、臼倉先生から研究の概要説明、報告をいただいた。この研究は、高校生の英語基礎力はどうのように伸びていくのか実態調査を行い、より現実的な指導法改善の一助につなげることを目的に始まった。中学生を対象とした先行研究で用いられた、主語位置に来る名詞句把握能力を測る「Billy'sテスト」に、新たな文法事項（後置修飾：現在分詞・過去分詞句、関係代名詞節）を加えた「Koukousei Billy'sテスト(KBテスト)」を開発し、高校生を対象に3年間定期的に実施した。分析の結果、現段階で、名詞句把握能力の3年間における伸び率は緩やかであることと、学習時期の遅い項目では正答率の伸びが低いということが指摘された。

この研究を踏まえ、後半のグループディスカッションでは、講師から投げかけられたディスカッション・トピックスに沿って議論した。今回は、Googleスライドにグループごとの議論の内容を記録し、全体で共有した。「名詞句把握に焦点を当てる意義」、「高校2年生のときにテスト結果がいったん落ち込むように見えるのはなぜか」、「KBテストの結果だけで英語基礎力を測れるのか」、「関係代名詞接触節を扱う問題でよく見られた

誤答は、母語（日本語）が影響しているのではないか」、「名詞句把握を意識したタスク活動の重要性」、「名詞句把握を指導に組み込む最適な時期」などの意見や質問が出た。これまでの研究では見切れていなかった視点も見つかり、活発な議論を行うことができた。

また、参加者の中には小学生を対象に日本語の名詞句把握に焦点を当てた指導を実践している方がおり、名詞句把握能力の明示的指導についても議論することができた。今後の研究の追加分析のヒントも得られ、2時間では収まりきらない、有意義な会となった。

◇研修企画委員会報告◇

5月月例会

日時：2023年5月13日（土）16:00～18:00

場所：オンライン（Zoom）開催

テーマ「学級経営の中核をなす英語の授業—生きた言葉でコミュニケーションできる生徒の育成を目指して—」

発表・報告者：尼寺圭悟

（千葉県千葉市立おゆみ野南中学校）

公立中学校の英語科の授業について、学級担任という立場も踏まえ、日々の授業での取り組みを紹介させていただきました。「生きた言葉」でのコミュニケーション能力を培うことで、英語を通してのコミュニケーションだけでなく、学級の仲間との関係もよくなり、誰にとっても過ごしやすいクラス環境をつくることができると考えています。

1. 授業をつくるうえでの大切にしている理論

授業を組み立てるとき、Output Hypothesis (Swain, 2005) の考え方を重視しています。もちろん、いきなり output させるのではなく、input から intake を経て output に発展する過程を大切にしています。1つ目の図のような Output Hypothesis の効果を利用することで、「なんとなく分かった」「分かった気がする」という状態ではなく、できることとできないことを明確にし、理

解が足りていない部分に関しては、もう1度inputに戻します。

また、outputの中でも、特にwriting活動を重視しています。それは、“Multicompetence”(Cook, 2008)を育成する目的からです。英文writingを通して、英語力そのものを培うだけでなく、writingを通してマルチコンピテンスとして学習者の能力となった論理的思考力を培うことができるからです。

一番大切にしている理論

Output Hypothesis (Swain, 2005)

1. 実際に使用することで、自分の足りない所に気づくことができる。
2. 自分で仮説検証をし、ミスを修正していく。
3. Outputの前後のthinkingによって、考えがさらに深まる。

2. 授業を通して育てたい生徒の力のゴール

英語授業を通して、目の前にいる生徒たちに、卒業するときに身につけてほしい力や生徒たちのなっていてほしい姿をイメージし、それを生徒たちと共有することが重要です。短期的なゴールではなく、未来の姿から逆算して長期的な視点を持ち、そのうえで、現在の学年・教科・単元等でどのような指導をすべきか、ということを考えています。

3. 実際の授業の中身

50分という毎時間の授業では、1つの活動を長くても10分以内に収めたり、活動的な展開にしたりして、集中力が途切れない工夫をしています。

① 短時間で、様々な活動をさせる

単語練習、音読、接続詞を考える活動等の帯活動を充実させたり、1時間の授業の中でも可能な限り4技能5領域の活動を取り入れたりしようとすると、必然的に1つの活動時間は短くなります。しかし、その短時間の活動をテンポよく、毎回の授業で継続していくことで、英語が定着する手助けとなっていると考えます。

② 講義型ではなく、生徒自身が仲間と共に活動し、思考させる

ICTを活用することで、「個別最適な学び」と「協働的な学び」がより可能となります。教員が長時間説明するのではなく、考えるポイントを示して生徒たち自身での考えを促したり、仲間と「協働」して答えを探す活動を取り入れたりすると、主体的な学びが実現されます。

4. まとめ

英語の授業を通して、「生きた言葉」でコミュニケーションできる生徒を育成しようとする、必然的に学級経営の視点も考えることができると思います。その結果、生徒たちが居心地の良い環境で学習に取り組めるようになるのではないのでしょうか。

より良い学級づくりのために

教科指導の大半は、学級・ホームルームを単位とした授業により進められます。授業を進めるに当たっては、個々の児童生徒の習熟の程度など、その学習状況を踏まえた個に応じた指導に取り組むとともに、児童生徒間の交流を図るなど、集団指導ならではの工夫をこらし、可能な範囲で生徒指導を意識した授業を行うことが大切です

(生徒指導提要p.44)

出典：文部科学省（2022）.「生徒指導提要」
入手先

https://www.mext.go.jp/content/20230220-mxt_jidou01-000024699-201-1.pdf

最後になりましたが、この度はオンラインで発表する機会をいただき、大変貴重な経験をさせていただきました。参加者の皆さまからもたくさんのご質問・ご感想をいただき、お礼申し上げます。どうもありがとうございました。

引用文献

- Cook, V. (2008). *Second language learning and language teaching* (2nd ed.). Arnold.
- Swain, M. (2005). The output hypothesis: Theory and research. In Hinkel, E. (Ed.) *Handbook of research in second language teaching and learning* (pp. 471–484). Routledge.

関東甲信越英語教育学会日誌

(2023 年 1 月～2023 年 6 月)

- 2 月 19 日 (日) 第 6 回運営委員会 (14:00～17:00, オンライン開催)
- 3 月 11 日 (土) 第 22 回英語教育「なんでだろう？」座談会 (14:00～16:00, オンライン開催)
「3 年間で英語名詞句把握能力はどのように変化するか—日本人高校生の
場合—」
講師：関東甲信越英語教育学会 研究推進委員会
伊藤泰子先生 (神田外語大学), 臼倉美里先生 (東京学芸大学)
- 3 月 21 日 (火・祝) 春季研修会 (9:50～15:50, オンライン開催)
1. 授業実践報告 (小学校)
『「理解したもの, できたもの」が使えるようになる喜びを味わわせる指導と
評価の工夫—市内全校が取り組む指導ハンドブックの実践から—』
加瀬政美先生 (千葉県旭市教育委員会)
(春季研修会時のご所属：千葉県旭市立第二中学校 校長)
2. 授業実践報告 (中学校)
『中学校英語授業における「指導と評価の一体化」を目指した事例報告』
田村岳充先生 (宇都宮大学)
3. 授業実践報告 (高等学校)
「＜高等学校＞新学習指導要領に基づいた 3 つの指導実践例」
土屋進一先生 (西武学園文理高等学校)
4. 講演
「新学習指導要領の指導と評価における現状と課題, 次のステップ—学年ご
との目標, 三観点, 言語活動に焦点を当てて—」
酒井英樹先生 (信州大学)
- 4 月 29 日 (日・祝) 第 1 回運営委員会 (13:00～15:15, 明治大学中野キャンパス [ハイレックス
開催])
- 5 月 13 日 (土) 5 月月例会 (16:00～18:00, オンライン開催)
授業実践報告「学級経営の中核をなす英語の授業—生きた言葉でコミュニ
ケーションできる生徒の育成を目指して—」
尼寺圭悟先生 (千葉県千葉市立おゆみ野南中学校)
- 6 月 18 日 (日) 第 2 回運営委員会 (13:00～15:00, オンライン開催)

<本紙図版一覧>

表紙写真「ひまわり」, p. 3「加瀬政美先生の授業実践報告」, p. 4「田村岳充先生の授業実践報告」, pp. 5-6「土屋進一先生の授業実践報告」, p. 7「酒井英樹先生の講演」, p. 10「尼寺圭悟先生の発表 (5 月月例会)」

編集後記

- ◆本号は、2022 年度関東甲信越英語教育学会春季研修会を特集いたしました。研修会は Zoom で行われ、英語教育の指導と評価のあり方について、学習指導要領と照らし合わせて振り返る貴重な機会となりました。発表者の先生方にはご発表に加え、KATE Newsletter の原稿執筆もご快諾いただき、誠にありがとうございました。また、「座談会」「月例会」についても報告記事を寄稿していただきました。この場をお借りして感謝申し上げます。ご都合が合わずご参加が叶わなかった方々もいらっしゃるかと思います。ぜひ本号の記事をご覧ください。
- ◆2023 年 3 月末日、取材活動や刊行物の制作にご尽力いただいた小木曾智子先生、工藤大奈さん、三上洋介先生がご退任されました。先生方には細かなところまで丁寧に作業していただきました。改めて感謝申し上げます。2023 年 4 月からは新たに、佐藤連理先生、埴千賀子さんのお二方に編集委員として加わっていただきましたので、以下に自己紹介を述べていただきました。
- ・本年度より、二度目の編集委員を務めさせていただくことになりました、佐藤連理（茨城県立水戸商業高等学校）と申します。学会業務に携わる中で、皆さまとともに英語教育に関する知見を深めていければと思っております。至らない部分もあるかと存じますが、どうぞよろしくお願いいたします。
 - ・本年度より、編集委員を務めさせていただくことになりました、埴千賀子（筑波大学大学院生）と申します。学会業務に携わる中で、自分自身が英語教育に関する学びを深めていくとともに、皆さまにわかりやすく有益な情報をお届けできればと思います。学会のお仕事を経験させていただくのは初めてですので、至らぬ点も多々あるかと存じますが、どうぞよろしくお願いいたします。
- ◆次号『KATE Newsletter』（2024 年 3 月発行予定）は、「2023 年度埼玉研究大会」を特集する予定です。また、本号まで紙媒体の郵送・PDF 版の配信を並行してまいりましたが、次号からは PDF 版に一本化させていただく予定です。PDF 版は引き続き、会員メーリングリストでお送りいたします。2022 年度からは、KATE Newsletter のバックナンバーを学会ウェブサイト (<https://kate-jp.sakura.ne.jp/category/kate-newsletter/>) で公開しております。本頁の URL に加え、右の QR からでもご覧いただけます。



2023 年（令和 5 年）7 月 10 日 No. 118

発行者 関東甲信越英語教育学会 代表者 西垣知佳子（千葉大学）

事務局 〒184-8501 東京都小金井市貫井北町 4-1-1

東京学芸大学 臼倉美里

学会ホームページ <https://kate-jp.sakura.ne.jp/>

編集 関東甲信越英語教育学会編集委員会

〔委員長〕 森 好紳 (email: ymori@fc.hakuoh.ac.jp)

〔副委員長〕 田中菜採

〔編集委員〕	伊東 賢	小野由香子	檜村祐志	神村幸蔵
	小室竜也	佐々木大和	佐藤連理	鈴木健太郎
	埴千賀子	細田雅也	水書 亮	